

論文 | Original Research Article

二重拘束状況における愛着の内的作業モデルと情報処理の関連
Internal Working Model and Information Processing
in Double-Bind Situation

宮野沙紀（株式会社タイヨーパッケージ）・喜田裕子（富山大学人文学部・教授）

Saki MIYANO Taiyo Package Inc.

Yuko KIDA Professor, Faculty of Humanities, University of Toyama

摘 要

本研究の目的は、二重拘束状況における愛着の内的作業モデルと情報処理の関連を検討することであった。大学生 74 名を対象に、二重拘束場面想定法の手続きに参加してもらい、情報処理の指標として自由再生記憶および感情変化を測定し、また、二重拘束場面に対する言語反応を自由記述で回答させた。その後、質問紙により、愛着を構成する 2 要因(見捨てられ不安、親密性回避)および二重拘束経験頻度を測定した。分散分析の結果、自由再生記憶については、誤再生数で見捨てられ不安の主効果が有意傾向であり、見捨てられ不安が高いほど誤再生数が多い傾向が認められた。感情変化に関しては、「緊張－不安」に親密性回避の主効果が有意で、親密性回避が高いほど二重拘束場面に対する覚醒水準の低下が示唆された。また、「抑うつ－落込み」「怒り－敵意」に関して、見捨てられ不安と経験頻度の交互作用が認められ、経験頻度が高い場合に見捨てられ不安が高いほどこれらネガティブ感情も高まることが示唆された。言語反応は 6 類型に分類され、愛着の内的作業モデルとの関連が考察された。

I 問題

愛着理論では、乳幼児期に主な養育者とのやり取りを通して愛着関係が形成されると考えられる。Bowlby(1969,1973)によれば、愛着の様相は行動レベルから、やがて内的作業モデル(Internal Working Model)といわれる内的表象へと形成され、対人認知的枠組みとして機能するようになる。愛着の内的作業モデルは、愛着関連の注意、記憶、感情、行動等の体制化を進行し(遠藤, 1992)、愛着関連の情報を防衛的に処理する(Bowlby, 1980)とされる。

Bartholomew & Horowitz(1991)は Bowlby(1973)の考えに基づき、「自己観(自己に対する作業モデル)」と「他者観(他者に対する作業モデル)」がそれぞれポジティブかネガティブかという組み合わせで愛着の内的作業モデルを捉え、2 軸の高低により「安

定型」「拒絶型」「とらわれ型」「恐れ型」に 4 分類する観点を提唱した。さらに Brennan et al.(1998)は、自己観に対応する「見捨てられ不安(以下、不安と略す)」因子、および、他者観に対応する「親密性回避(以下、回避と略す)」因子から構成された質問紙を作成した。「自己観がポジティブである」ということは「愛着対象から見捨てられるかもしれないという不安が低い」ということであり、「他者観がポジティブである」ということは「愛着対象との親密な関係を回避しない」ということであると考えたからである(中尾, 2012)。愛着の 2 次元 4 類型モデルを図 1 に示す。

さて、これまでも愛着と情報処理との関連が検討されてきている。まず、「回避」次元は親密さを不快と感じる程度を反映し、愛着システムの不活性化を伴うため、愛着関連の情報への注意が低下

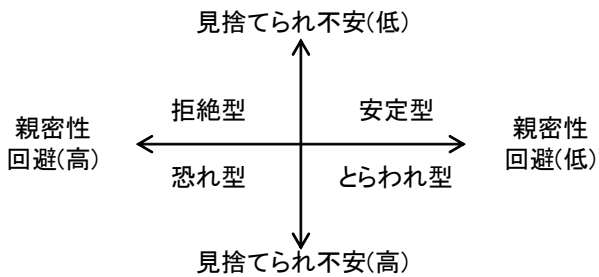


図 1 愛着の 2 次元・4 分類モデル (中尾・加藤 (2003)をもとに作成)

して記憶量が少なくなると考えられる(Fraley et al, 1998)。実際、回避と記憶には負の関連があることが実証されてきた (e.g. Mikulincer & Orbach, 1995; Fraley et al., 2000)。一方、「不安」次元は、拒絶・喪失への過敏さの程度を反映し、愛着システムの過活性化を伴うため、不安と記憶量には正の関連があると予測できる。しかし、今までの研究では、不安と記憶の関連は必ずしも一貫していない。たとえば、Mikulincer & Orbach(1995)は抑圧防衛に着目し、回避的な人は抑圧の防衛を使用するが不安-アンビバレントな人は抑圧の防衛を使用しないという仮説を立て、エピソード記憶の想起にかかる時間を指標とした検討を行った。その結果、回避的な人は想起時間が最も長く抑圧防衛をある程度用いていることが示され、不安が高い人は想起時間が最も早く、抑圧防衛をあまり用いていないことが示された。この研究から、不安の高さは、愛着システムの過活性化による必要以上のストレスへの注目とその処理の困難さにつながることを示唆された。しかしながら一方で、Edelstein et al.(2005)は、愛着システムの過活性化が愛着関連の情報の記憶を強化するという予測のもと、不安が高い人は低い人と比較して愛着関連の情報が強化されると予測したが、実験の結果は無関連であった。

Fraley, Garner & Shaver(2000)によれば、Dorgman-Botens(1994)は防衛過程を、「先行防衛」と「後行防衛」に区別した。先行防衛とは、望ましくない感情や思考を活性化する事象への注意を

最小限化し、情報の符号化をあらかじめ制限する過程である。後行防衛とは、既に符号化された考えや記憶を事後に抑制・不活性化する過程である。回避的な人は先行防衛を有効に用いていることが分かっている(Fraley et al., 2000)。一方、不安について一貫した結果が得られていない理由として、上述の先行研究がいずれも個人の自伝的記憶を扱っていることが挙げられる。一定期間を経過した後の記憶では、先行防衛と後行防衛という異なる過程による効果の相殺の可能性が避けられないと考える。

そこで本研究では、可能な限り符号化段階における先行防衛に焦点をあてるための工夫として、さらには愛着システムを活性化させたいという情報の処理過程を実験的に扱う工夫として、青木(1993)の記憶実験パラダイムを参考にした。青木(1993)では、「記憶の実験は、主観的経験を客観的に測定するために適した手段である」と捉え、実験室における不整合な二重拘束刺激に対する再生記憶を検討している。二重拘束状況(Bateson et al., 1956)とはコミュニケーションの病理で、表出されるメッセージとそれに対立する矛盾するメッセージが同時に伝達され、受け取った側が一貫した満足のいく方法で行動できなくなる(平木,1981)とされる。二重拘束状況は相手の考えを読み取ることが困難で行動に迷いが生じやすい状況であり、健常者においても不安が増す状況であることが解明されている(Smith, 1976)。特に、二重拘束状況では満足に行動ができないため、葛藤や欲求不満状態が生じると考えられる。欲求不満状態では怒り感情が生じやすい(大平, 1987)ことから、本研究では不安に加えて怒り感情に注目したい。愛着システムについては、金政(2003)によれば、自身の安全性に脅威を感じるような特定の状況で活性化するという立場 (Mikulincer, Florlan & Weller, 1993; Simpson et al., 1992)がある。この立場に立つなら、二重拘束状況を提示することによって、愛着の内的作業モデルによる先行防衛過程の処理の

違いが検証できると考えた。また、愛着は対人関係とも関連があり、青年の対人態度を測定した詫摩・戸田(1988)の研究では、各愛着スタイルで対人態度の特徴が異なることが示されている。

本研究の目的は愛着と情報処理の関連について以下の3点から検討することである。第1に、再生記憶を指標として認知的側面から検討することである。仮説は以下のとおりである。回避が高いと愛着システムを不活性化させ、情報への注意をそらし記憶量を制限するため、再生量が少ないだろう。また、不安が高いと愛着システムを過活性化させ情報への注意が増すため、再生量が多く、過度のモニタリングを行うために、誤再生が増加するだろう(仮説1)。

第2の目的は、気分変化を指標として感情的側面から検討することである。仮説としては、回避が高いと愛着関連の情報に対して注意をあまり向けないため、二重拘束状況直面後は感情値が減少するだろう。また不安が高いと、過度のモニタリングゆえに感情値が増加するだろう(仮説2)。なお、Smith(1976)は二重拘束という現象は健常者の生活において共通した経験ではないことを示唆している。二重拘束状況の感情への影響力には個人の経験頻度が関連すると考えられるので、二重拘束の経験頻度もあわせて検討することとした。

第3の目的は、愛着スタイルによって二重拘束状況に対する応答に違いがあるか探索的に検討することである。

II 方法

予備調査 実験刺激作成のため、心理学を専攻する学生6名から、過去に家庭内で経験した二重拘束状況をインタビューで収集し、さらにSmith(1976)を参考とし、刺激文を作成した。臨床心理学を専門とする第2著者が刺激の妥当性を検討した。

実験参加者 A大学学部生74名(男性13名、女性

61名；平均19.55歳，SD=1.20)。

実験計画 不安2(高・低)×回避2(高・低)の2要因参加者間計画とし、必要に応じて二重拘束状況の経験頻度2(高・低)を第3の要因として追加した。

刺激 母親と子どもの大学受験に関する会話(二重拘束状況を含む)を書いた台本を作成した。くわえて母親の台詞部分をあらかじめ40代女性が読み上げて録音した音声刺激を作成した。その母親の台詞に対する参加者の反応の台詞を、パソコン画面上に呈示した。

従属変数 (1)POMS(Profile of Mood States)短縮版：横山(2005)によるPOMS日本語版の65項目の短縮版に用いられている30項目を使用した。刺激呈示前後の気分について5件法で回答を求めた。

(2)自由再生課題：刺激呈示後に母親役の発話内容を筆記再生してもらった。(3)二重拘束課題：P-Fスタディ(林, 1987)を参考に、二重拘束状況が想定される母子のイラストを作成し、図中の母親の「もう勝手にしなさい」という台詞への返事を、子どもの吹き出しに記入させた。(4)ECR-GO (the Experiences in Close Relationships inventory-the-generalized-other-version)：Brennan et al.(1998)が作成したECR尺度の一般他者版(中尾・加藤, 2004)である。愛着スタイルを構成する2因子を測定するための多項目式尺度(30項目)に7件法で回答を求めた。(5)二重拘束状況の経験頻度：親とのコミュニケーションの中での二重拘束状況の経験の頻度について5件法で回答を求めた。

手続き 記憶の実験であることは伏して、ベースラインの感情値を測定した。録音された女性の音声を自分の母親であると想定するよう教示した後、PC画面上に表示された台詞を見ながら実際に声をだしてPC画面との会話を行ってもらい、終了後に感情値を測定した。その後、母親役の台詞を筆記再生してもらい(5分)、二重拘束課題に取り組んでもらった。終了後、愛着質問紙に回答させ、ディブリーフィングの後、二重拘束状況の経験頻度を尋ねて終了した。実験所要時間は約30分程度

であった。

Ⅲ 結果

不安・回避の分類 平均値をもとに分類した。回避(平均値:49.51)は49点以下を低群,50点以上を高群とした。不安(平均値:64.54)は64点以下を低群,65点以上を高群とした。回避・不安の高低を組み合わせた4分類では,安定型20人,拒絶型14人,とらわれ型23人,恐れ型17人となった。

記憶再生数,正・誤再生数の分析 参加者の自由再生について,実験者および本研究の目的を知らない評定者1名が正・誤再生を評定した。一致率は74%で,ほぼ十分と認められた。評定不一致の項目では,評定者の判断を採用した。目的1を検証するため,記憶再生数,正・誤再生数それぞれに関して不安2×回避2の2要因分散分析を行った結果,誤再生数にのみ不安の主効果が有意傾向であることが認められた($F(1,70)=3.72, p<.10$)。分析の結果,不安高群($M=2.57, SD=1.40$)の方が低群($M=1.94, SD=1.23$)よりも誤再生が多い傾向が認められた($p<.10$)。

なお,記憶再生数に群間の差が認められなかったことから,補足分析として,刺激項目による再生数のかたよりがないか検討した(図2)。その結果,二重拘束メッセージを含んだ項目 No.12 の総再生数が最も多かった。次いで,母親役からの二重拘束後に子ども役が行った自律的反応に対する母親役の応答(項目 No.15)の総再生数が多かった。

不安および回避の高低別の総再生数を示す(図3, 4)。全体で再生数の多かった No.12, No.15 に着目すると,回避では低群,不安では高群のほうの再生数が多くなっていた。

刺激呈示前と刺激呈示後の感情値の変動 目的2を検証するにあたり,まずは刺激呈示後の感情値から刺激呈示前の感情値を差し引いた変化量を各感情で算出した。また,5件法で尋ねた二重拘束状況の経験頻度については,3(「どちらでもない」)

を選択した参加者がいなかったため,1(「ない」),2(「あまりない」)を選択した者を低群,4(「少しある」),5(「ある」)を選択した者を高群とした。そして感情の変化量を従属変数とした不安×回避×経験の3要因分散分析を行った。なお,各要因の相関については回避-経験: $r=-0.26(p<.05)$,不

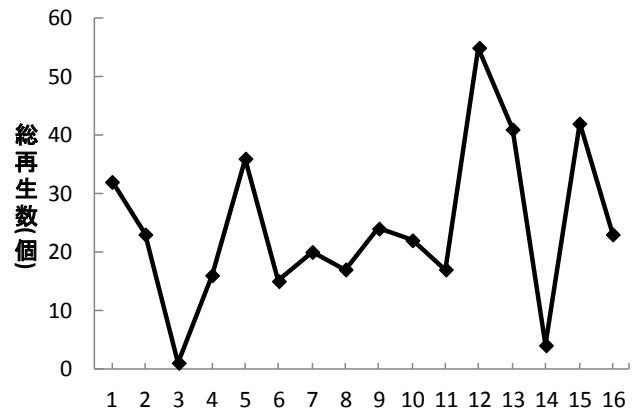


図2 各項目の総再生数(重複回答)

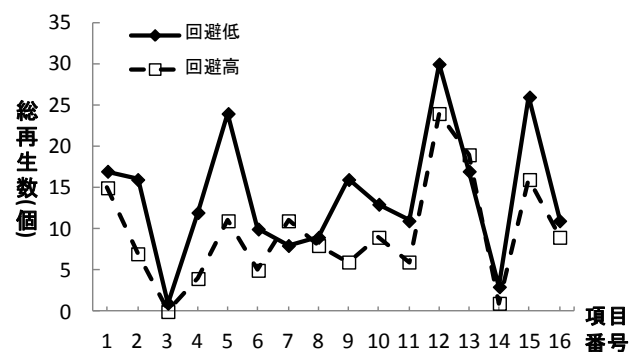


図3 回避高低ごとの各項目の総再生数(重複回答)

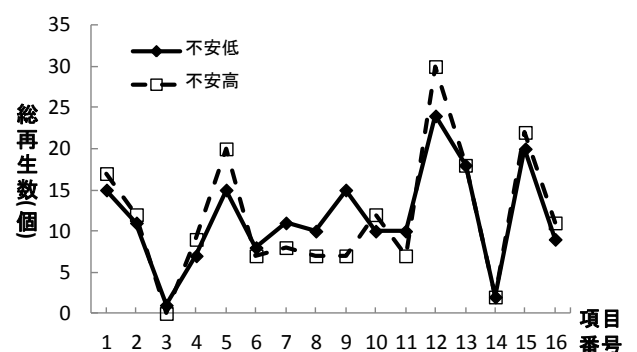


図4 不安高低ごとの各項目の総再生数(重複回答)

表 1 「抑うつ－落込みの変化量」に関する 3 要因分散分析の主な結果

主効果・交互作用	F	p	多重比較・単純主効果の多重比較
不安	0.194	0.661	n.s.
回避	1.770	0.188	n.s.
経験	0.309	0.580	n.s.
不安×経験	7.487	0.008 **	経験低：不安低($M=2.29, SD=2.52$) > 不安高($M=0.00, SD=3.34$) * 不安高：経験低($M=0.00, SD=3.34$) < 経験高($M=2.37, SD=2.40$) * p<.05 * p<.01 **

表 2 「怒り－敵意の変化量」に関する 3 要因分散分析の主な結果

主効果・交互作用	F	p	多重比較・単純主効果の多重比較
不安	0.670	0.416	n.s.
回避	0.252	0.618	n.s.
経験	0.063	0.809	n.s.
不安×経験	5.596	0.021 *	経験低：不安低($M=4.21, SD=3.41$) > 不安高($M=1.64, SD=2.74$) * 不安高：経験低($M=1.64, SD=2.74$) < 経験高($M=3.75, SD=3.27$) + p<.10 + p<.05 *

安－経験： $r=-0.21(p<.10)$ ，回避－経験： $r=-0.14(n.s.)$ と低い数値であった。

活気、疲労、混乱 各要因の主効果，単純交互作用，2 次の交互作用は認められなかった。

緊張－不安 回避の主効果が有意であった($F(1,66)=4.44, p<.05$)。分析の結果，刺激呈示後に回避高群は低群に比べて得点が減少していた。

抑うつ－落込み，怒り－敵意 不安×経験の交互作用が認められた(表 1, 2)。両感情ともに，刺激呈示後に経験頻度が低い不安低群の方が不安高群よりも有意に得点が増加していた。また，刺激呈示後に不安高群において経験頻度高群の方が低群よりも有意に得点が増加していた。

各愛着スタイルの応答の違い 二重拘束課題で得た応答を KJ 法(川喜田,1967) によって分類した結果「了解(例：わかった，そうするよ)」「拒絶(例：

ほっといてよ)」「歩み寄り(例：そんなこと言わんと私の話を聞いてよ)」「不満(例：何でそういう言い方をするの?)」「怒り(例：うるさいな！勝手にするわ!))」「とまどい(例：…(無言))」の 6 つの応答が得られた。応答を愛着スタイルごとに整理した(表 3)。

IV 考察

本研究の目的は，愛着と情報処理の関連について，①愛着による記憶再生の違いを検討すること，②二重拘束状況に直面する前と後で感情がどのように変動するかを愛着の観点から検討すること，③各愛着スタイルの二重拘束状況における応答の違いを探索的に検討することの 3 つであった。

1. 二重拘束状況での記憶課題

先行研究(e.g., Fraley et al., 2000)とは異なり，再生数への回避の影響は認められなかった。また，再生数への不安の影響も認められなかった。理由として，課題が容易であったがゆえの天井効果と，実験手続きが場面想定法であったために，愛着システムを活性化する実験状況としては必ずしも十分ではなかった可能性が考えられる。ただし，誤

表 3 KJ 法による応答分類の度数分布表

応答の種類	愛着			
	安定型	拒絶型	とらわれ型	恐れ型
了解	9	9	9	7
拒絶	1	3	3	3
歩み寄り	3	0	4	1
不満	4	2	3	0
怒り	1	0	3	1
とまどい	1	1	1	3

再生数に関しては不安の高低によって差が認められた。これは仮説を部分的に支持するものである。予想通り、不安が高い人は過度のモニタリングにより、符号化した情報が誤った方向へ強化されていたと考えられる。とらわれ型(本研究における不安高×回避低群)の特徴として、「怒りの解釈が不正確」(Magai, C., Distel, N. & Liker R., 1995), ポジティブな記憶よりもネガティブな記憶にアクセスする傾向がある(Mikulincer & Orbach, 1995)ということがこれまでに見出されている。また Rholes, W.S. & Simpson, J.A. (2008)によると Mikulincer & Shaver(2003)は不安の高い人の語りには安心感への願望・他者から受け入れられたいという願望が目標となって語られるという特徴を示すとされる。これらの知見をふまえると、不安の高い人は二重拘束のような脅威的状况を、不正確かつ自己の願望を加えて処理する傾向が示唆された。

補足分析では、二重拘束メッセージ(No.12)が最も多く再生されていた。弁別性の高い情報や他の情報と様々なかたちで結びついている情報に記憶に残りやすい(仲, 2007)。二重拘束メッセージは感情的口調を伴うことが多く、矛盾する複数のメッセージが同時に伝達されることから、注意を引きやすく記憶に残りやすいものであることが考えられる。2 番目に再生数が多かった No.15 は、二重拘束後の自律的行動に対する母親役の応答であった。すなわち二重拘束を受けることにより、相手との関係性へのモニタリングが高まりやすいことが示唆された。さらに、気分－状態依存効果(mood-state dependency effect), すなわちある気分で記録された情報は、検索時に同じ気分であればよりよく検索される(仲, 2007)という現象を考慮に入れるなら、刺激が呈示されている間に不快な気分が生じそれが自由再生課題時まで継続したために、それとの関連が深い No.12・15 の検索が多く行われたと見ることもできるかもしれない。不安・回避それぞれの高低ごとの総再生数ではさらに興味深い結果が得られた。全体として再生の多かった

No.12 および No.15 について、不安高群は低群よりも、また回避低群は高群よりも、再生数が多いことが見出された。データ数の関係で統計的な検討ができなかったが、回避による愛着システムの不活性化および不安による過活性化という本研究の仮説を支持する方向性のデータであり、今後更なる検討が必要である。

2. 感情の変動

「緊張－不安」感情で回避の主効果が有意であったことは、仮説 2 を支持したといえる。回避高群は低群に比べて、刺激呈示後に「緊張－不安」が減少した。拒絶型(不安低×回避高)は顕在的な自己イメージを保つために苦痛を伴う愛着の信号を不活性化する(e.g., Bowlby, 1973)とされる。さらに回避的な人は自分が喜びや悲しみを経験することが不快である(坂上・菅沼, 2001)ことから、回避高群は二重拘束状況にともなうネガティブ感情を感じることで自体が不快で、緊張すなわち覚醒水準を低下させることによって刺激への注意を回避した(先行防衛)のではないかと考えられる。

一方、不安の主効果が認められなかった点は予想に反していた。ただし、不安高群においてのみ、経験頻度の高群が低群に比べて「抑うつ－落込み」「怒り－敵意」がともに高くなったことは注目に値する。一般に、何かを経験することによって、そのような事態に対する慣れが生じることが考えられるが、逆に、反復される辛い経験に対しては 1 度目より 2 度目の悪影響を大きく被ることも考えられる。ある出来事によって症状が誘発されるときは、そのような出来事が生じたのは初めてではないことが多く、反復であることが一般的に観察されるという(Malan, 1979; 鈴木, 1992)。二重拘束状況に対するこのような経験の悪影響が、不安高群においてのみ認められたといえる。不安が高い人は、見捨てられ不安を低減するために再確認傾向をとりやすく、それが抑うつ状態を悪化・維持させる(宇野・宮本, 2005)ことが分かっている。不

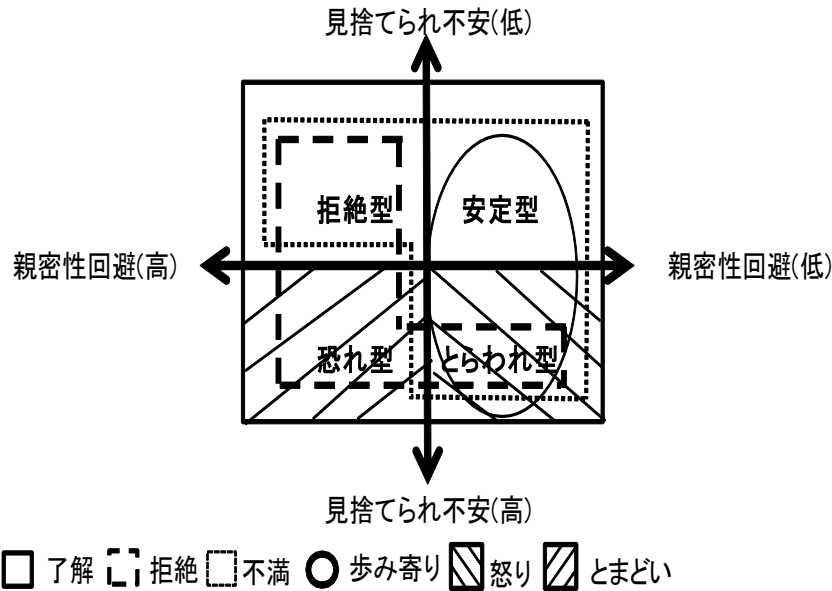


図5 二重拘束状況における愛着の応答特徴

安高群における経験高群は、不安の高まりゆえの再確認行動をより多く行ってきており、その結果「抑うつー落込み」感情が刺激呈示後に増加したのではないかと推測できる。また、「怒りー敵意」感情に関しては、とりわけ、愛着不安の高い者は、愛着対象に対して怒りを経験しやすい傾向、怒り感情への統制不可能なアクセスおよび表出、および怒りに関する思考を過度に反芻するという特徴がある(Mikulincer, 1998)。二重拘束状況の特徴として、参加者がその状況におかれている間は不安感情が増加し続け、状況への適応が困難だったことが示されている(Smith, 1976)。以上から、不安の高い人は、潜在的に脅威的である二重拘束状況をより脅威として受けとめ、それを経験すればするほど、相手の意図や顔色を読み取ろうとするようなモニタリング作業へと感情的に巻き込まれていくことが示唆される。

一方、二重拘束経験低群のなかでは、不安低群のほうが不安高群よりも、「抑うつー落込み」「怒りー敵意」などのネガティブ感情が高かった。一般に、人は様々な期待を持っており、その期待が満たされないと怒りを覚える(Lelord, F. & André, C., 2001)傾向がある。二重拘束状況とは、自分の満足

のいく行動ができない欲求不満や葛藤が生じるため、怒りや敵意が生じやすい状況であるといえる。だとすれば、経験頻度が低い場合、不安低群のほうが、生じた感情をよりありのまま覚知していたと理解することが可能かもしれない。ただしこれは従来の知見に沿った解釈にとどまるものであり、今回のデータでは、ネガティブ感情値が上昇することの心理的意味や背景を細分化して捉えることができなかったことが反省される。今後の詳細な解明が課題である。

3. 二重拘束状況に対する応答の違い

応答の違いについては、統計的分析に適したデータ数が得られなかった。ここでは現時点での結果に基づき、今後の研究に向けての仮説を述べたい。まず、「了解」はすべての群に共通されるもっとも一般的な応答である。「拒絶」は、安定型にのみ少ない反応である。「歩み寄り」は、回避低群(安定型ととらわれ型)に多く、回避高群(拒絶型と恐れ型)に少ない。「不満」は恐れ型にのみ少ない反応である。「怒り」はとらわれ型にのみ多い反応である。「とまどい」は恐れ型にのみ多い反応である。以上を図5に示す。

拒絶型・恐れ型といった回避高群は、他者は応答的ではないといったネガティブな他者モデルが想定される群である。“歩み寄り”が回避低群(安定型・とらわれ型)と比べて少ないのは、このような信念ゆえであると考えられる。ただし、同じ回避高群のなかでも拒絶型(不安低)と恐れ型(不安高)では、“不満”“とまどい”において様相が異なっていた。恐れ型は自己モデルもネガティブであるため、“不満”のような応答が他者との関係を悪化させる懸念からその表出を控え、“とまどい”のような自分のとるべき行動を決めかねて抱え込む方向に向かいやすいのではと推測される。これは、恐れ型の二重拘束状況での行動の困難さを示しているといえる。

一方、回避低群のなかで、不安の高いとらわれ型は、“怒り”表出を最も行った。これは、とらわれ型が、怒りを多く経験し(Magai et al., 1995)、実際以上の情動を経験する(Pietromonaco & Barrett, 1997)との知見と一致する。しかし今回のデータは筆記された文章のみであり、また、応答の心理的背景についても推測の域を出ない。今後は、実際の口調や思考も含めて検証することが課題である。

V まとめ

本研究で二重拘束状況における愛着と情報処理の関連について明らかとなった点を述べておきたい。第1に、課題が容易な場合、記憶再生数には内的作業モデルによる違いが認められなかったが、誤再生数に関しては不安の高さの影響が認められ、不安が高い方の誤再生数が多かった。第2に、内的作業モデルによって脅威的状況に対する感情の活性化に違いが認められた。回避が高い人はネガティブな情動を不活性化できるが、不安の高い人は不活性化ができない(Fraley & Shaver, 1997)との知見を部分的に支持するものであった。すなわち不安が高くかつ二重拘束の経験頻度が高い場合にネガティブ情動を不活性化できず、その状況に対

して情動的により巻き込まれやすくなることが示唆された。経験頻度の影響を明らかにしたことは本研究の意義であるといえる。二重拘束状況の経験頻度については、その尋ね方を今後はさらに工夫することが必要だと考える。

注 記

本論文は、第一著者による平成25年度富山大学人文学部卒業論文「二重拘束状況における愛着の内的作業モデルと情動処理の関連」をもとに、再分析と大幅な加筆修正をしたものである。

文 献

- 青木みのり (1993). 二重拘束コミュニケーションが情報処理および情動に与える影響 教育心理学研究, 41, 31-39.
- Bartholomew, K. & Horowitz, L.M. (1991). Attachment style among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
- Bateson, G., Jackson, D., Haley, J. & Weakland, J. (1956). Toward a theory of schizophrenia. *Behavioral Science*, 1, 251-261.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss: Vol.1. Attachment* New York Basic(ボウルビィ J. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子(訳)(1976) 母子関係の理論 愛着行動 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and Loss: Vol.2. Separation* New York Basic(ボウルビィ J. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子(訳)(1977) 母子関係の理論 分離不安 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and Loss: Vol.1. Attachment* New York Basic(ボウルビィ J. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子(訳)(1981) 母子関係の理論 対象喪失 岩崎学術出版社)
- Brennan, K.A., Clark, C.L. & Shaver, P.R. (1998).

- Self-report measurement of adult attachment: an integrative overview. In J.A. Simpson & W.S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: The Guilford Press. pp.46-pp.76.
- Dorgman-Botens (1994). *Adult attachment: Individual differences in defensive strategies and implications for physical health*. Unpublished doctoral dissertation, State University of New York at Buffalo.
- Edelstein, R.S., Ghetti, S., Quas, J.A., Goodman, G.S., Alexander, K.W. & Redlich, A.D. (2005). Individual differences in emotional memory: Adult attachment and long-term memory for child sexual abuse. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 31, 1537-1548.
- 遠藤利彦 (1992). 愛着と表象—愛着研究の最近の動向：内的作業モデル概念とそれをめぐる実証研究の概念とそれをめぐる実証研究の概観—心理学評論, 35, 201-233
- Fraley, R.C. & Shaver, P.R. (1997). Adult attachment and the suppression of unwanted thoughts. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 1080-1091.
- Fraley, R. C., Davis, K. E., & Shaver, P. R. (1998). Dismissing-avoidance and the defensive organization of emotion, cognition, and behavior. In J. A. Simpson & W. S. Rholes. (Eds.), *Attachment theory and close relationships* (pp. 249–279). New York: Guilford Press.
- Fraley, R.C., Garner, J.P. & Shaver, P.R. (2000). Adult attachment and the defensive regulation of attention and memory: Examining the role of preemptive and postemptive defensive processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 816-826.
- 林勝造 (1987). 日本版ローゼンツァイク P-F スタディ解説 基本手引 1987 版 三京房
- 平木典子 (1981). 家族療法 新版 心理学辞典 Pp.98 平凡社
- 金政祐司 (2003). 成人の愛着スタイル研究の概観と今後の展望—現在、成人の愛着スタイル研究が内包する問題とは— 対人社会心理学研究, 3, 73-84.
- 川喜田次郎 (1967). 発想法 中央公論出版社
- Lelord, F. & André, C. (2001). *La force des emotions*. Editions Odile Jacob. (ルロール, F. & アンドレ, C. 高野優(訳)(2005) 感情力 自分をコントロールできる人できない人 紀伊國屋書店)
- Magai, C., Distel, N. & Liker, R. (1995). Emotion socialization, attachment, and patterns of adult emotional traits. *Cognition & Emotion*, 9, 461-481.
- Malan, D.H. (1979). *Individual Psychotherapy and the science of psychodynamics*. Butterworth & Co publishers Ltd. (マラン D.H. 鈴木龍(訳) (1992) 心理療法の臨床と科学 誠信書房)
- Mikulincer, M., Florian, V. & Weller, A. (1993). Attachment styles, coping, strategies, and posttraumatic psychological distress: The impact of the Gulf War in Israel. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 817-826.
- Mikulincer, M. & Orbach, I. (1995). Attachment styles and repressive defensiveness: The accessibility and architecture of affective memories. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 917-925.
- Mikulincer, M. (1998). Adult attachment style and individual differences in functional versus dysfunctional experiences of anger. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 513-524.
- Mikulincer, M. & Shaver, P.R. (2003). The attachment behavioral system in adulthood: Activation, psychodynamics, and interpersonal process. In M.P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol.35, pp.53-152). New York: Academic Press.
- 仲真紀子 (2007). 感情と記憶 高橋恵子・河合優

- 年仲真紀子(編) 感情の心理学 放送大学教育振興会 Pp.71-Pp.84.
- 中尾達馬・加藤和生 (2003). 成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか?—4 カテゴリー(強制選択式, 多項目式)と3 カテゴリー(多項目式)との対応性— 九州大学心理学研究, 4, 57-66.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- 中尾達馬 (2012). 成人愛着スタイルについての実証的研究 中尾達馬 成人のアタッチメント愛着スタイルと行動パターン 株式会社ナカニシヤ出版 Pp.29-Pp.64.
- 大平英樹 (1987). 怒りの感情とその反応について—Averill の質問紙による調査: 怒りの動機と反応の関係を中心として— 人間科学研究, 9, 1-8.
- Pietromonaco, P.R. & Barrett, L.F. (1997). Working models of attachment and daily social interactions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 1409-1423.
- 坂上裕子・菅沼真樹 (2001). 愛着と情動制御—対人様式としての愛着と個別情動に対する意識的態度との関連— 教育心理学研究, 49, 156-166.
- Shaver, P.R. & Mikulincer, M. (2006). What do self-report attachment measures assess? Rholes, W.S. & Simpson, J.A. *Adult Attachment Theory, Research, and Clinical Implications*. New York: The Guilford Press. 中尾達馬 自己報告式アタッチメント測定は何を測定しているのか(ローズ W.S. & シンプソン J.A. 遠藤利彦・谷口弘一・金政裕司・串崎真志(訳)(2008) 成人のアタッチメント—理論・研究・臨床— 北大路書房)
- Simpson, J.A., Rholes, W.S. & Nelligan, J.S. (1992). Support seeking and support giving within couples in an anxiety-provoking situation: The role of attachment styles. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 434-446.
- Smith, E.K. (1976). Effect of the Double-Bind Communication on the Anxiety Level of Normals. *Journal of Abnormal Psychology*, 85, 356-363.
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1988). 愛着理論から見た青年の対人態度—成人愛着スタイル尺度作成の試み— 東京都立大学人文学報, 196, 1-16.
- 宇野千咲香・宮本正一 (2005). 成人愛着スタイルが再確認傾向に及ぼす影響 東海心理学会第54回発表論文集, 68.
- 横山和仁 (2005). POMS 短縮版 手引と事例解説 金子書房
- (投稿: 2014. 03. 29)
- (受理: 2014. 06. 22)